

【兵庫】薬剤師、医系技官、勤務医を経て激戦区にクリニック開業-稲垣忠洋・いながき内科クリニック院長に聞く◆Vol.1

2022年3月31日（木）配信 m3.com地域版

薬剤師、厚生労働省の医系技官、勤務医を経て西宮市にクリニックを開業。内科勤務医時代に培った糖尿病の知識を生かし、地域医療に貢献するいながき内科クリニック院長の稲垣忠洋氏に、異色の経歴からの開業の経緯、西宮の医療の現状について聞く。（2021年2月10日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



いながき内科クリニック院長・稲垣忠洋氏

——先生は現在、糖尿病の専門医として活躍されていますが、薬剤師、医系技官と多彩な経歴をお持ちです。まずは医師を目指されたきっかけについて教えてください。

薬剤師から医師にキャリアチェンジをしたのは、薬剤師の仕事を通じて、患者さんと接するうちに、薬だけではなく疾病に関することや臨床的なことも学びたいと考えようになったからです。キャリアアップのためにも大学に戻って医師を目指すことにしました。

——医師になられたのち、厚生労働省の医系技官になられたんですね。

医学部時代に厚生労働省に勤務されているOBの話聞く機会があり、保険医療に関わる制度づくりの中心となる医系技官という仕事に興味を持ちました。医系技官時代は、診療報酬点数表に新たな診断に対する算定方法を追加したり、臨床評価指標の開発などに携わり、非常に貴重な経験をさせていただきました。

——医系技官としてではなく、現場の医師としてキャリアを築きたかったのはなぜでしょうか。

働き始めて、大きな組織の中で、自分の思う正しいことをやり遂げるまでには非常に時間がかかるということが分かりました。そして、制度づくりに関わる中で、現場の声がとても重要であることに気がつきました。官僚組織が上がっていき管理職となるよりも臨床医として生きたいという思いが強くなったのです。臨床医は、患者さんの病気を自ら判断し、さまざまな決断をしながら治療を進めていく必要があるため、専門性を磨くのはもちろんのこと、視野の広さも必要となります。医系技官として働いた経験もプラスになると思いました。

——医療の現場に戻られた後、どのような経緯で糖尿病分野に進まれたのですか。

最初に勤務した慈泉会相澤病院で恩師に出会ったのがきっかけです。その先生から糖尿病専門医としてエビデンスに基づく医療の大切さと病気に苦しむ患者さんに寄り添う姿勢を学びました。それが現在の診療に生かされていると思います。

——クリニックを開業されたきっかけは。

勤務医時代に糖尿病チームや栄養サポートチームを立ち上げ、チーム医療のマネジメントをしました。その経験から、糖尿病診療の質を向上させるためには、多職種によるチーム医療を実践し、知識を共有して、科学的に討論する機会を増やしていくことが重要だと実感しました。このようなチーム医療を実践するために開業に至りました。

——兵庫県西宮市というとクリニックと病院の激戦区ですよね。古くから地域に根付いている病院も多いですし、経営面に不安はありませんでしたか。

おっしゃる通り、西宮にはたくさんの医療施設があります。ですが、患者さんのニーズも多様化しています。その中で、自分の得意分野で勝負できると考えました。経営面での不安は特に感じませんでした。

——糖尿病の治療において重視していることや、患者さんとのコミュニケーションで大切にしていることはありますか。

まずは患者さんに治療の必要性を理解していただくことです。糖尿病は喉が渇いたり、体重が減ったりといった初期症状はありますが、落ち着いてくると症状があまりみられません。ほぼ無症状であっても、血糖値のコントロールが不良な期間が長くなれば合併症を発症して失明したり、透析が必要になったりします。そうならないために、無症状の期間でもしっかりコントロールをしていく必要があるということを伝えながら、治療に対するモチベーションを維持してもらうことを重視しています。

◆稲垣 忠洋（いながき・ただひろ）氏

いながき内科クリニック院長。2002年神戸大学医学部医学科卒業。日本内科学会 総合内科専門医、日本糖尿病学会 糖尿病専門医。大高大学薬学部薬学科卒業。神戸大学医学部医学科卒業。公立学校共済組合 近畿中央病院 薬剤部、厚生労働省 医系技官を経て、慈泉会相澤病院、西脇市立西脇病院、国立病院機構兵庫中央病院、清和会笹生病院に勤務。2019年にいながき内科クリニックを開業。

【取材・文＝和谷 尚美（写真は本人提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

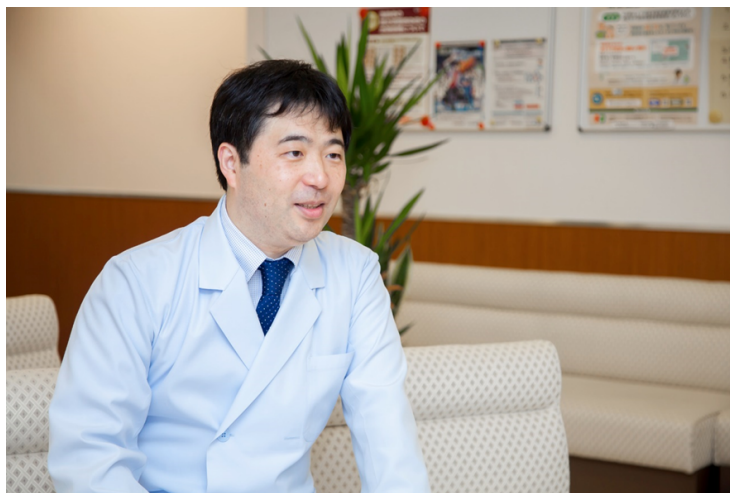


【兵庫】患者の心に響かない話は無意味と気づき、自己開示に目覚める-稲垣忠洋・いながき内科クリニック院長に聞く◆Vol.2

2022年3月31日（木）配信 m3.com地域版

薬剤師、厚労省の医系技官、勤務医を経て西宮市にクリニックを開業。内科勤務医時代に学んだ糖尿病とターミナルケアの知識を生かし、地域医療に貢献するいながき内科クリニック院長の稲垣忠洋氏に、患者との向き合い方と地域連携の重要性、そしてwithコロナ時代における医療のあり方を聞いた。（2021年2月10日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)



いながき内科クリニック院長・稲垣忠洋氏

——患者が治療のモチベーションを維持するために、どんなコミュニケーションを心がけていらっしゃいますか。

糖尿病に関する基本的な知識を丁寧に説明することですね。あと、私はこれまでの診療経験から、現時点で症状がなくても、その患者さんが10年後、20年後どういう状態になるか予想がつかます。それをお伝えるのに、どのような伝え方をするかも大切だと思っています。

勤務医時代に糖尿病教室を開いていたのですが、その撮影動画を見直した時に、自分の話し方がなんだか偉そうに思えました。正しいことを言っているのですが、目線が上からなんです。みなさん、「勉強になりました」と言ってくれましたが、知識としては学んでもまったく心に響いていない。そのとき、医者目線ではなく、みなさんと同じ、生活者の一人として同じ目線で話さないとダメだということに気が付いたんです。それ以降の講演では、自身の祖父が糖尿病で末期腎不全になり65歳で亡くなったことや、母親も糖尿病で治療を続けていることをお話したり、自分の血糖値を記録したグラフを見せながら、自分も中年で糖尿病予備軍だから一緒に予防しましょうというスタンスで話すようになりました。

——教室以外にご自身の患者さんにもそのようなお話をされるのですか。

実際に私が歩いているウォーキングコースの話をするなど、なるべく身近な話題で、これならできるかもしれないと思えるようなこととお話するようにしています。食べたらダメな物、飲まないといけない薬など、守ってもらわないと患者さんのためにならないことはしっかりお伝えしますが、やはり継続的に治療することが大変重要になってきますので、厳しく指導するようなことはありません。患者さんの奥様に「先生、もっと厳しく言ってください」なんて言われることもありますよ（笑）。でもキャラじゃないことはやらない方がいいと思っているので、どの患者さんにも同じように接しています。

——西宮エリアにはたくさん病院・クリニックがあるというお話がありましたが、地域連携はされていますか。

はい。すぐ近くの笹生病院は以前に勤務していたこともあり、患者さんを紹介したり、逆に紹介していただいたりと連携をしています。また、さきほど訪問診療も行っているとお話しましたが、近くの高齢者施設や病院からの紹介で、1型糖尿病など、自己注射をされている糖尿病患者さんに訪問診療をしてほしいというご依頼もいただきます。

現在は運動のために歩いて回っていますが、最近は徐々に件数も増えてきましたので、電動自転車を購入しようか迷っています。

——勤務医として初めて仕事をした病院で出会った恩師から受け継がれたことを、しっかりと形にされているんですね。

そうですね。あの頃からたくさん経験を積み、知識を深めていろいろなことができるようになりました。今は医師として、患者さんの要望にはできるだけ答えたいと思っています。そのためにはもっと地域との連携が必要だと思っています。

——例えば、どういった連携が必要だとお考えですか。

近隣の眼科や耳鼻科、皮膚科などの先生方と、普段からコミュニケーションをとり、得意分野を把握しておくことが大切だと考えます。お互いに気軽に質問しあえるような関係性を築いていきたいです。

——話は変わりますが、COVID-19対策はどんなことをされていますか。またwithコロナ時代においてどのような形の医療を展開していこうとお考えでしょうか。

当クリニックでは「空間的分離」と「時間的分離」で対策をしています。院内は見えていただければ分かる通り、非常に広く仕切りも開放しており、かつ、待合が特定の数以上になれば別室を使用するなど密にならないようにしています。また、発熱されている方はお電話であらかじめお伝えいただき、発熱患者同士が重ならないよう時間差でご来院いただきます。場合によっては、時間外に来院いただくこともあります。待合ももちろん別にしています。発熱されて、診てもらえる病院が見つからないという方はできるだけ受け入れるようにしていますが、かかりつけの患者さんの安心・安全に配慮しつつできる範囲で対応したいと考えています。それが私のwithコロナ時代における姿勢ですね。

——糖尿病患者はCOVID-19に感染すると重症化しやすいと聞きましたが、患者さんにはどのように伝えていきますか。

その点は患者さんからよく聞かれますね。普段から良好にコントロールできていれば普通の方と同等です。血糖値が上がると免疫力が下がるので、感染はしやすいといえますが、その後重症化するかどうかは発症後のコントロール次第だと思います。コロナが流行っているからと受診控えられて、血糖コントロールが悪化し、入院に至るというケースもありますので、定期的な受診をお勧めするようにしています。

——では、最後に今後、医師または経営者として新たに取り組みたいことがあれば教えてください。

今後やりたいことは二つあります。一つは糖尿病の専門医として地域に健康に関する知識を発信するような啓発活動をしていくこと。もう一つは訪問診療の質を高めることです。

◆稲垣 忠洋（いながき・ただひろ）氏

いながき内科クリニック院長。2002年神戸大学医学部医学科卒業。日本内科学会 総合内科専門医、日本糖尿病学会 糖尿病専門医。大高大学薬学部薬学科卒業。神戸大学医学部医学科卒業。公立学校共済組合 近畿中央病院 薬剤部、厚生労働省 医系技官を経て、慈泉会相澤病院、西脇市立西脇病院、国立病院機構兵庫中央病院、清和会笹生病院に勤務。2019年にいながき内科クリニックを開業。

【取材・文＝和谷 尚美（写真は本人提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

